日本医史学雑誌　第67巻第3号（2021）　288–295

医史学と私

岡田　靖雄

青柿舎（精神科医療史資料室）

「医史学と私」をかくように編集委員長から依頼された．じつはわたしは“学”がきらいで，自分の仕事は“精神科医療史”としている．

医学部3年生のときに精神科教授の内村祐之さんは講義のなかで“Forscherになれぬものは Arztになれ”といわれた．医学部の講義が医学研究を中心としていて臨床実践にあまり目をむけていないことに不満を感じていたので，“よし，おれは Arztになるぞ”と覚悟をきめた．臨床の場とうつった松沢病院でも，臨床より研究を目ざす人のおおいことがわかってくると，“研究は臨床の敵だ”とおもうようになった．

ところで，「医史学と私」は本誌第36巻第4号（1990年）までシリーズとして掲載されていたもので，かがやかしい先人たちが筆をつらねていた．この伝統をつぐからには題はかえられない．ただ，“医史学”と肩をはるよりは，一般的には“医学史”とするほうがよいとおもっている．

Ⅰ．歴史への接近

1．松沢病院まで

もともと歴史はすきであった．旧制中学校時代に東洋史をおしえてくれた新妻利久さんは渤海史を研究した人で，その学識をあつくかたってくれた．1951年に駒場の東京大学教養学部から本郷の医学部にうつると，すぐに解剖学の講義がはじまった．階段教室の小講堂で教授の小川鼎三さんが，ちょっとうつむいてから顔をあげると，“この麻田剛立はですな”と，渋味あるがよくとおる声ではなされた（その声はいまも耳にのこっている）．小川さんは当時，中央公論社からでていた一般むけ自然科学雑誌『自然』に解剖学史にふれる文章を連載していた．2年生のときに，弁護士で講師の山崎佐さん（戦争中の医史学会理事長）の「医事法制学」があったが，山崎さんが医学史にふれることはなかった．

わたしは東京大学精神科での2年の研修ののち，“ここに臨床はない，病院で患者さんとともにいきたい”と，1958年に東京都立松沢病院にうつった．この年に立津政順さん（当時医長）の「戦争中の松沢病院入院患者死亡率」（精神神経学雑誌，第60巻第5号）がでた．敗戦の年の40.9%という死亡率はまさに衝撃であった．受け持ち病棟の主任としてきた北島治雄さんから，栄養失調から死者続出にいたる状況を具体的にきかされた．松沢病院史にひきつけられ，『日本残酷物語』現代篇第1巻（1960年，平凡社・東京）にかいた「癒えざる者の声」が，わたしの最初の歴史ものとなった．自家は空襲にあわずにすんだが，すんでいた福島県平市（現いわき市）は空襲をうけて父の実家もやかれた．平和への願いはつよくあった（これは，岡田編著『もうひとつの戦場　戦争のなかの精神障害者／市民』［2019年，六花出版・東京］に最終的に結実した）．

松沢病院では最初4年間“不潔病棟”と通称される男の病棟をうけもってその改良（普通病棟化）にとりくんだ．戦後精神科医療史の素描を背景とした4年間の活動報告が『精神科慢性病棟』（1979年，岩崎学術出版社・東京）である．

松沢病院は1919年に東京府巣鴨病院から移転してきたもので，木造建築の改築期がせまっていた．これを機会に精神病院のあたらしいあり方をさぐり，新病院の構想をもとめていこうと，医局に病院問題研究会（オープンドアの会，これからの精神病院セミナール）ができ，大半の医局員がそこに参加した．1900年の精神病者監護法，1919

年の精神病院法にかわり制定された1950年の精神衛生法の改正も，1960年代にはいると論じられるようになり，1964年にはいると，これからの精神病院ゼミナールに“精神衛生法シリーズ”がはじめられた．

こんななかで，篤学の病院栄養士鈴木芳次さんが呉秀三・樫田五郎『精神病者私宅監置ノ実況』（1918年，内務省本）を吉岡眞二さん（歴史研究をともに推進した同僚）とわたしとにかしてくださった．そこに“我邦十何万ノ精神病者ハ実ニ此病ヲ受ケタルノ不幸ノ外ニ，此邦ニ生レタルノ不幸ヲ重ヌルモノト云フベシ”のはげしい言葉をみいだしておどろいた．わたしがその大部分に批判的であった東京（帝国）大学医学部教授にもこういう人がいた！ それまで呉先生とは，病院会議室の壁にならべられた歴代院長肖像画の1枚にすぎなかったが，あらためてそのまえに頭をさげた．またおどろいたことに，この論文の存在をしる先輩はほとんどいなかった．鈴木さんがこの論文を紹介したのは栄養師関係の雑誌だったので，それが精神科関係者の目にとまることはなかった．

ところで，1964年3月に統合失調症青年によるライシャワ駐日合州国大使刺傷事件がおこり，つづいて精神衛生法改悪の動きがでた．急激にもりあがった精神科関係者の反対運動によって改悪はくいとめられ，運動は精神衛生法全面改正の要求となった．この機に“精神衛生シリーズ”の研究成果を『精神衛生法をめぐる諸問題』として，松沢病院医局病院問題研究会から出版した（この編集発行人として精神医療史研究会が名をだしたが，この中心となったのは吉岡さんとわたしとである）．この本の資料篇には呉・樫田論文の中核部分をいれたので，これがこの論文の再発見と目されるにいたった．その後“二重の不幸”は障害者運動の旗印となった．またわたしは，おなじ松沢病院の加藤伸勝さんとともに，日本精神神経学会の精神衛生法に関する委員会の事務局をになったので，当時としては特例として厚生省の精神衛生審議会を傍聴することができた．ここでの法律的な考え方や法律の実務面についての耳学問はおおきかった．1977年の「精神衛生法」（『現代精神医学大系』第5巻C・精神科治療学III，中山書店・東京）では，精神衛生法規史研究をさらにすすめることができた．

呉先生は1865年生まれである（1932年没）．その生誕100年となる1965年にはいくつかの記念行事がおこなわれた．精神医療史研究会では『呉秀三先生――その業績』（要約つき著作目録）を1966年中にだす予定で，業績顕彰会の会員募集をおこなったが，先生の著作量があまりにおおすぎたなどの事情で，発行は1974年になった（このとき編集発行者は精神科医療史研究会と改称していた）．この巨人の伝記をだれがかくのだろうとおもっていたが，1982年の呉秀三先生没後50年記念にあわせて同年に『呉秀三　その生涯と業績』および『呉秀三著作集』2巻をだすことができた（思文閣出版・京都）．小川鼎三さんは記念事業会の会長をつとめてくださった．この会の成果である記念誌も1983年に発行された．

松沢病院の最前身東京府癲狂院は1879年に創立された．1972年には精神医療史研究会で『松沢病院九〇年略史稿』をだした．創立100年にむけては，わたし個人の仕事として『私説松沢病院史』（1981年，岩崎学術出版社・東京）をだすことができた．

2. 学会とのかかわり

日本医史学会は1927年に創立され，呉先生が初代理事長であった．その例会への出席は，大塚恭男さん（医学部同級で同グループ）が「脚気病院とその後」を報告した北里図書館での1974年1月26日が最初である．入会はかなりまえである．1979年4月野口英世記念館での第80回総会で「作品をとおしてみる松沢病院一〇〇年史」を報告したのが，総会報告の最初である．例会では1978年11月25日の「呉秀三先生のあとを追って」が最初で，1980年1月からは“新春興行”と称して年初例会で発表することを2020年までつづけた（コロナ騒ぎで2021年にはできず）．例会司会もかなりながくやった．

1999年の日本医史学会総会は，1892年の医家先哲追薦会からかぞえて第100回となる．これを記

念してときの酒井シヅ会長を編纂委員長として『日本医史学会総会百回記念誌』があまれることになった．酒井委員長の指名により，記念誌の中軸となる「日本医史学会の歩み」をかいた（発行2000年）．

1960年に日本科学史学会の医学史部門をつくりたいとの丸山博大阪大学教授の狙いから，緒方洪庵150年記念医学史研究集会がもよおされた．これをうけて1961年11月に第1回医学史研究会がもよおされた．その関東地方会準備会が12月にあり，1962年4月にこの第1回例会がひらかれた．この中心は川上武さんで，わたしも準備会段階から参加した．当時日本医史学会は明治前を主対象としており，医学史研究会の焦点は明治以降であった．川上さんは医学史よりは医療史を重視しており，かれに兄事するわたしは精神科医療史の構築を目ざすことになった．医学史研究会はほそぼそとながら，今も活動している．川上さんを通じては，科学的認識の3段階論をといた原子物理学者武谷三男さん，歴史学者で社会評論家の羽仁五郎さんをしった（その後羽仁さんにちかづくにつれてかれの重大な問題点がみえてき，それは戦後左翼論説史につながるもので，このことはなんらかの形でしるしておきたい）．

精神医学史学会（現在，日本精神医学史学会）は1997年に当時の東京大学教授（精神医学）の松下正明さんの呼び掛けで発足した．この学術総会にはほぼ毎回出題してきた．

3. 東京大学への転勤およびその後

1966年台弘教授の求めで東京大学医学部精神医学教室の助手となった．間もなく大学闘争がはじまり，附属病院内では精神科がもっともはげしい闘争の拠点となった．教室・医局は教授批判派，教授派に分裂し，わたしは教授批判派に属していた．東京大学闘争がしずめられていくなかで，教授批判派の病棟では“もっとおおきなものがくる”と臨床実践を軽視する動きがつよくなり，ついていけなくなったわたしは1972年に助手をやめた．そのまえ日本精神神経学会では1969年に理事にえらばれていたが，1971年に理事・評議員をやめていた．医療生活協同組合の診療所（→病院）に職をえて，1996年まで週3日の精神科外来診療をおこなっていた．

わたしは精神科医療改革のリーダーと目されてきた．東京大学精神科をやめるときは，“敵前逃亡者”の意識をもっていて，自分の行動の総括を表明することはできなかった．そこで精神科関係の公けの活動からは身をひき，この謹慎蟄居の姿勢は2001年までつづけた．

精神医療史研究会があつめた資料は松沢病院においていたが，吉岡さんほかが松沢病院をさるにおよんで，吉岡さんと共同で吉祥寺に部屋をかりて拠点とし，年数回の研究会をおこなった．また，めずらしい資料の複写をとじた『呉秀三先生記念精神科医療史資料通信』を年3回，1984年4月から2004年6月の総括第61号までだした．吉岡さんが1995年になくなり，また吉祥寺の部屋では資料をおさめきれなくなったので，2005年7月に自宅近くにマンションをかって資料をうつし，そこを青柿舎と名づけた．ここでは年2回の研究会をひらいている．

上記のような事情で1972年から自分の時間を医療史研究により集中するようになった．おもな仕事の主題をあげておくと，斎藤玉男回顧談，森林太郎“統計論争”，戦前の精神病院における死亡率・脚気発生状況，狐憑き（ここでは島邨俊一の仕事を再発見した），安藤昌益，戦前の精神科病院数・病床数，精神病者慈善救治会，榊俶伝，“淫事と精神病”，精神科作業療法史，戦前合州国に留学した精神病学者，長山泰政著作，精神科における用語，暉峻義等，早尾乕雄，国民優生法，などである．

小川さんが主宰していた谷口財団医史学部門国際シンポジウムの第4回“History of Psychiatry—Mental Illness and its Treatment”は1979年10月に静岡県裾野市でおこなわれた．わたしはそこで“110 Years of Psychiatric Care in Japan”を報告した．外国語でかかれた最近の日本精神科医療通史はほかにないようである．

古書展で（江戸）医学館の考試弁書『癲癇狂弁』を入手した．これまでは仕事の対象年代を明治期

以降としてきたが，これを機に明治前にもひろげた．2002年には日弁連研究財団のハンセン病問題に関する検証会議の検討会の委員となった．その最終報告書（2005年）にかいた「ハンセン病患者および精神病患者の比較法制・処遇史」は多くの問題提起をふくむ論文であるが，最終報告書は200部しかつくられていないので，この論文は注目されないままでいる．

1972年からのおおきな著作としては，『差別の論理　魔女裁判から保安処分へ』（1972年，勁草書房・東京），『精神病医齋藤茂吉の生涯』（2000年，思文閣出版・京都），『日本精神科医療史』（2002年，医学書院・東京），小峯和茂・橋本明と共編『精神障害者問題資料集成（戦前編）』（2010–16年，全12巻，六花出版・東京），編『精神障害者問題資料集成（戦後編）』（2010年，全12巻，六花出版・東京）（補巻準備中），『吹き来る風に　精神科の臨床・社会・歴史』（2011年，中山書店・東京），編著『もうひとつの戦場　戦争のなかの精神障害者／市民』（2019年，六花出版・東京）がある．また異色の仕事としては，日本精神衛生会・きょうされん提携事業の映画『夜明け前　呉秀三と無名の精神障害者の100年』（2018年）への出演がある．

Ⅱ．資料集めについて

青柿舎所蔵資料で第1のものは，精神医療史研究会といったころに吉岡さんが中心に主として国会図書館であつめ東京大学医学図書館でおぎなった，戦前の一般医学雑誌中の精神科関係論文・記事のほとんどの複写である．これは他に類のない収集であろうし，複写の持ちはながくないといわれているが，60年たった今もちゃんとしている．

巣鴨病院―松沢病院の年報の病院事務保存分にはかなりの欠落があったが，先輩から所蔵のものをいただいて，ほぼ全巻をそろえた（わたしの『私説松沢病院史』は年報によるところがおおきい）．改築にともなう本館移転の際には，歴史的に貴重な資料（とわたしたちがおもうもの）がやきさられようとした，やくためにつんであるものから吉岡さんがすくいだしてくれたものはおおい．林暲院長がやめるとき，自分からすてはしないが，すてられていいようにつんでおいたなかにも，貴重なものがかなりあった．東京大学精神科物置きにつんであった半ごみにも，とくに呉先生に関する貴重品がいくつかあった．歴史にかかわる重要資料は，平時に施設の責任者がえりわけておき，施設の管理下におかなくてならない．

東京神田の古書会館では月に2，3回の古書市がひらかれていて，60年ぐらい毎回かよっている．そこでの掘り出し物をおもいつくままにあげると，足裏の灸や桶伏せの絵をいれた「乱心之妙薬」をふくむ写本『諸家秘法集』（記名はないが一般医による手控えだろう，1805年），前記の『癲癇狂弁』，後藤新平が石黒忠悳に贈呈した『衛生制度論』抜き刷り，“Dr.Sh.Saito斎藤茂吉七月二十六日民顕．三十万マルク”と内表紙にしるされたK. Jaspers“Allgemeine Psychopathologie”（第3版，1923年）（かれは義父紀一にいわれて，医学者としての自分の名をシゲヨシとよんでいた），日本医史学会関西支部の機関誌『醫譚』の戦前および戦後初期の製本されていないきれいな揃い（関西支部でだした復刻本はこれによっている）などがある．呉・樫田論文内務省本の所蔵が確認されているのは3冊かである（鈴木芳次さん所蔵だったものはどこかへいってしまったらしい）．北里図書館の蔵書印をけしたらしいこれを入手できたが，4ページ落丁していた（といっても貴重本である）．

松沢病院医局には，巣鴨時代からの医師による落書き帳が30冊近くのこっていた．そのなかには，齋藤茂吉さんの頃のものが2冊あり，それは有名な齋藤茂吉研究者の著書に紹介された．その1冊が医局にないので，その著者にといあわせると，“林先生にお借りし，お返ししました”との返事があった．数年してある古書店の目録にそれが19万円ででていた．すごい値と目をむいたが，これはほかにわたしてはならぬと，かっておいた．吉岡さんがなくなってからは青柿舎の資金は全部わたしがだしている．特別な高給取りではない一介の精神科医であるが，妻が医者でかせいでくれる（また二人ともつつましくくらしている）ので，

こういう費用はなんとかだせる．相馬事件につき当時だされたもの35冊も古書市でかいそろえたものである．

はじめにかいたように，わたしが精神科医療史にひきつけられるきっかけの一つになったのは，北島治雄さんの語りである．わたしはふるい先輩の多くに気にいられて，その話しをきくことができた（戦前と戦後とをつなげる立ち場にあった）．また精神科医療史研究会では先達何人かの話しをうかがい，その録音をおこしたものを『呉秀三先生記念精神科医療史資料通信』に付録した．話しをうかがったのは，伊藤正雄さん（肥前療養所，開放制），小林八郎さん（武蔵療養所，生活療法），加藤正明さん（精神衛生研究所，東京医科大学，社会精神医学），南孝夫さん（桜ヶ丘保養院，東京都精神衛生課），廣瀬喜美子さん（肥前療養所，開放制），佐藤壹三さん（市立銚子病院，千葉大学，地域），懸田克躬さん（東北帝国大学，脳研究室，順天堂大学），渭原武司さん（諸精神病院における看護人の戦後史），竹村堅次さん（慶應大学，烏山病院），吉岡眞二さん（自分史），大谷藤郎さん（厚生省，精神衛生行政）である．この記録は『20世紀からの証言』として一本にまとめたかったが，採算の見込みがたたないとのことであった．

わたしがあつめているなかには，画集，ポスター，映画のパンフレットもあるが，上記のような聞き取りは大事な手法であるし，医学関係の歴史研究ではもっともっと活用されるべきものである．2013年4月の日本医史学会例会では，橋本明さん，中村治さんをまねいて聞き取り（あるいはoral history）についてシンポジウムをおこなった（本誌第59巻第3号，2013年）．

わたしは患者会をふくむ関係運動体のビラ・通信をあつめてきた（だいたいは，会員として会費をはらって）．こういう収集はほかにはないだろう．『精神障害者問題資料集成』では所蔵品をかなりおおくつかった．精神科では1969年の精神神経学会金沢総会以来かなり長期にわたって学会内，諸教室・医局，諸病院での闘争がつづき，関係団体間の抗争もあった．はげしい闘争のあった精神科教室・医局の人に資料提供をお願いしたところ，“警察の弾圧をおそれてビラや資料はどんどんやいてしまった”との返事がいくつかあった．おおきな闘争・運動でも資料がちゃんとのこされているとはかぎらない．あらそっていた片方の資料は入手できても，他方のものはのこっていない．つまり，かたよった資料しかないのである．くやしいがこの穴はうめられない，とおもうとともに，のこされる歴史とはじつはこういうものかと嘆め息をついた．

そろえようとしているのは，“立派な”ものだけではない．精神病否定論，血液型性格学など世にはやる俗説のものもかっている．時代をしるには，そういった資料もかかせない．

資料をあつめても，収納の場所に限りがあり，整理の時間もないので，あるはずの資料を山のなかからさがしだせずにいる（今は週1日の秘書がすこし整理してくれた）．

のこる問題は，あつめた資料の最終処理である．仲間の吉岡眞二さんは，京都岩倉の家庭看護をながく研究してきて，何回も調査にいき，のこっていた資料の購入に2000万円ぐらいつかったときいた．はやく論文にすることを何回かすすめたが，“もすこししらべて”と共著論文を一つのこしただけでなくなった．遺族はかれの資料を国会図書館にでも寄贈しようかといっている．結局，かれの資料集めは，その後の研究者が資料に接近することを遮断する形となった．わたしが『呉秀三先生記念精神科医療史資料通信』を発行し，さらに『精神障害者問題資料集成』を編集しているのは，あつめた資料をできるだけ多くの人に利用してもらいたいからである．わたしの脳力が歴史研究にたえなくなったとき資料は，東京都立松沢病院の資料館に寄贈することになっている．

Ⅲ．医療史の諸分野，人物誌の意味

かいてきた精神科医療史の分野をみると，通史，用語史，戦争関係，差別問題，施設史，団体史，法制史，個人誌といったことになろうか．医学史・医療史は，英雄礼讃的個人誌―施設史―社会的病者史とすすむようである．ふりかえってみると，わたしは人物誌（個人史）をかなりかいて

いて，それがすきである．

とりあげた個人は，まず呉秀三先生，それからその周辺の人として富士川游（日本医史学会の創立者），森林太郎，齋藤茂吉，尼子四郎，藤浪鑑，樫田五郎，榊俶，大隈重信，齋藤玉男，黒澤良臣，松原三郎，石田昇，加藤普佐次郎（精神科作業治療の実践者），清水耕一（松沢病院看護長）がいる．ほかに安藤昌益，來住彌次郎（精神科医としては無名だが，東京帝国大学柳島セツルメントにかかわりつづけた），芦原金次郎（将軍また帝と称し，もっとも有名だった患者），島邨俊一（狐憑きを島根県の現地で調査），暉峻義等，片山國嘉，内村祐之，津川武一，立津政順などをとりあげた．わたしは人物誌を時代の結節点ととらえ，その意義を強調してきている．

『○○先生追悼文集』といったものをみると，その業績とお人柄との讃辞にみちていて，その人の人間味をおおいかくしているものがおおい．そういった伝記はいやである．人をうごかすものに，理念―情念―欲念の3段階がある．おおくの伝記はその人の理念だけをかかげていて，上記のように，底のあさい，つまらぬものになっている．わたしは情念，欲念まできわめたいとおもってきた．この点で理想的とおもえる形でかけたのは齋藤茂吉伝である．かれは，日記および手紙に性欲の面まであからさまにかいている．妻の弟の子青木義作（精神病医）が三宅鑛一教授（呉先生の後任）により高田脳病院に派遣されることになったとき，“三宅先生ハ坊チヤン也”としるしたあと，“Mト云フ男モ好イ加減ニセヨ”と日記にかいている．内科の丸井清泰が東北帝国大学の精神科教授になったときは，“仙台の□□などは，秀才で内科から直ぐ洋行して，精神科の教授になつたけれども，実は分かりつこが無いのだ”と青木あての手紙にしるしている．

呉先生の外祖父箕作阮甫は洋学者で，優秀な門弟に自分の娘たちをとつがせて，巨大な箕作山塊をつくった．当時の洋学者は，蘭学禁止令のもとで迫害され（暗殺の危険も感じて声をひそめていた），時期がくるともてはやされ，またつかいまわされた．箕作一族には“権可変，学不易”（岡田）という気風がうまれた．呉先生をうごかしたのはこの気風である．ここまでつきとめたことで，呉先生の情念にとどいたといえよう．

人物をながくおっていると，その人の意外な面がみえてくる．ジグソウパズルのように，断片的だった情報もある程度あつまってくると形をなしてくる．もっともおもしろいのは，内村鑑三の息子でわたしの教師であった内村祐之さんである．多くの教授は，医学部長とか病院長になると，あからさまに自分の科の利益をはかるが，内村先生はそんなことのない立派なものだった，ときいた．みてくるとだんだんみじめな人になってきた．自尊心はたかくて，門下が傑出するのをこのまぬ人，自分の身をまもるために部下をうることさえしたらしい人であった．門下の津川武一さんがうけもった患者のことが石上（当時は“いそのかみ”，のち“いしがみ”）玄一郎による『精神病学教室』という小説（1943年）になり，そこでは学問のためには患者がしんでもよいとする非情の人として教授がえがかれている．内村さんは石上とは津川さんのペンネームだとおもい，津川さんを破門して，津川さんの弁明をききいれず，かれがその症例につきかいた論文を“なくして”しまった．津川さんは，わりあいしたしくしていたわたしにも真相をかたらなかった（もちろん，論文紛失のことはふせたまま，どうも論文紛失は小説のまえ）．かれは戦後詳細な日記をかいたが，内村さんの葬儀のときに内村夫人に“あの小説の作者はわたしでないことはわかっていただけたでしょうか”といった，とある．日記にも真相をかいていないのである．一次史料の最たるものとされる日記でも，信用しきれない．津川さんは戦前からの共産党員で，戦後は何回か衆議院議員に当選もした．党内抗争で除名されたこともある．一般的には津川さんはつよい人と評価されるが，わたしにみえてきたのは，かれの弱さである．

学問をしない人間なので，精神医学者でもその業績のただしい評価をすることができず，もっぱら人をみている．学者でもその研究業績だけでなく，教室なり病院をどう運営したかの業績も大事である．こういった面の業績は人柄とおおきくむ

すびついている．ともかくも人をみつづけてくると，かつてはげしく批判していた人もかなしい存在になってくる．わたしの年齢のせいか．

なお，人物評価につきいっておかなくてならないのは，その人がいきた時代のなかでのその人を評価することである．現在の基準をもって，あの人はこの点たりなかった，あやまっていた，といった意見をしばしば目にするが，こういった安楽椅子からの評価はしてならない．

Ⅳ．わたしにとっての医療史

わたしは臨床医療にたずさわるとともに，精神科医療の改革にとりくんできた．謹慎期間にも患者会運動に関与してき，2001年からは保安処分制度―医療観察法への反対運動に参加している．こういうなかで歴史とは，問題の構造を立体的にてらしだすものであり，それをしることは運動の方向をみさだめるためにもかかせない．また，変化のはげしい世であり，現在の運動もいわば10年ごとに歴史的総括をしていかなくてならない．ちょっと恰好よすぎるが，“行動しながら歴史し，歴史しながら行動する”というのが，わたしのモットーである．歴史探求は行動者としての要請に動機づけられているといってよいか．学問は中立公正なものでなくてならぬといわれるが，個人としての要請に発するからには純粋に中立公正なものではありえない．といっても，かたよった情報だけあつめていては，運動をあやまった方向へみちびいてしまう．他の探究者なみの公正さはたもてているだろうと自讃している（かれは“医療の社会化を目ざしている”との批判のあることはしっている）．一般に医学史研究者が自分の動機・出発点を確認しておくことが必要とかんがえるので2017年11月25日の日本医史学会例会では，月澤美代子さん，渡部幹夫さん，逢見憲一さんの参加をえて，「わたしはなぜ医学史・医療史をまなぶのか」のシンポジウムをおこなった（本誌第64巻第4号，2018年）．

探求の対象としてきたものは，精神科医である自分に関係したこと，その延長にあるものがおおい．関心があるものは日本国内の事情であり，外国のことは日本の事情に関係したものだけに目をむけてきた（たとえば，日本の初期精神病学教育の渕源となるヨーロッパの学説，それをもたらした学者）．自分の態度を“尊王攘夷”ととなえてもきた．といっても外国のものをそうゆがんだ目でみてはおらず，他の人より妥当なばあいもある（たとえば，“mental illness”は“精神病”と訳するべきでなく，“精神疾患”とするべきである）．

ほかの方がたよりはこまかく資料をあつめ，それらにこまかく目をくばってきたものと自認している．たとえば，呉先生の卒業の日を確認するために，同級生の伝記をできるだけあつめて，それぞれの卒業の日をたしかめた．すると，おどろくべきことにそれぞれの日がちがうのである．わかったことは，だいたいの人は自分の卒業試験のおわった日を卒業日として記載している．しかし大学全体の公的卒業式は，卒業試験がおわったつぎの年におこなわれる．そこで，この年を卒業年としるす人もいて，卒業前に就職する形にもなってしまう．こまかくみていくと，おもいがけぬ発見もある．今の人（とくくってはまずいか）には，読み方があさくてズサンな人もあるようである．最近も本誌上でひどい論文をみた．世の中全体にあまくなっているのか，ともおもう．

ところで，わたしは全般的に批判的にすぎるようである．それは医者になるとすぐから，精神科関係のことでいわれてき，でも，他人のアラがみえてしまうことはさけられない．本学会の評議員会で，ある論文の欠陥を例に編集委員会を強化しなくてならないと発言した．懇親会会場にむかう途中，最高幹部から“いいこといってくれた，ああいうこといってくれる人いないんですよ”といわれた．数か月後に“評議員会は掲載論文批判の場ではない”との注意書きを常務理事会からいただいた．退会をおもいたったが，この学会をやめたら自分の活動の場が半分あまりうしなわれると自重した．ある幹部はわたしを大久保彦左衛門になぞらえられた．その諫言にみなは耳をかたむけてはみせるが，実権からはとおざけられている人というのが，わたしの大久保彦左衛門像である．

日本精神神経学会改革にわたしは尽力していた

が，今のあり方には批判的である．精神科医療改革の最左端にちかくいたが，中流にながされたとおもったが，いまはまた最左端にいるようだ．逆にいって，他の人がかつて反対していたものの執行役にまわっていくような変化が納得できない．年おいてなおわかい夢をおう老ピーター・パンらしい．

わたしは医学部3年のころから精神科医療にふれてきたし，先輩から戦前事情につききくこともできた．足掛け70年にちかい経験があり，ずいぶんおおきなこともあった．この間に体験し見聞したことはできるだけつたえておきたい．といって，ただしいといまおもえる立ち場でつねに行動してきたわけでなく，まちがったことに手をかしてもきた．過去の記録には“告白し告発する”という姿勢も要求される．自分の過去の誤まりをけしてしまっては歴史探求者ではなくなってしまう．のこる時間がどれだけあるか．評価はもとめず，のこせるものはただのこしたい．

さて，これは偏学してきた偏人の偏言だろうか．

（2021年7月2日記）